

2026（令和8）年3月校長メッセージ「時間について考えたこと」

「時計の科学 人と時間の5000年の歴史（織田一朗著 講談社 BLUE BACKS）」という本を読みました。紀元前4000年～紀元前3000年に出現した人類最初の日時計に始まって、現代の超高精度時計までの時計の進歩について書かれています。

そもそも時間の存在に最初に気が付いたのは誰でいつのことでしょうか。この著書には、人は太陽の動きにつれて、木や岩の影が長さや方向を変えていくのを見て、時間の存在に気がついたと言われていると書かれていて、日光によってできる影を目視することによって、時間の存在を知覚したと述べられています。以前私は「数は発見か発明か」について考察したことがありましたが、時間も「発見か発明か」きわめて悩ましい命題でしょう。物理学的な視点から考えれば、そもそも宇宙には人類が存在しようとしまいと物理的な法則によって支配される変化や因果関係があり、その変化や因果関係によって生じる事象は不可逆な現象だと考えられていること、すなわち膨大なガスから恒星が生じて核融合を行いながら熱と光を発生し、やがて大爆発を起こして別の天体へと変化していく過程は、時間が存在するから生じる現象であることから、人類は時間を発見したということができそうです。アインシュタインが時間は絶対的なものではなく、重力や速度によって伸び縮みすることを相対性理論で証明したこと、すなわち時間が人間の主観を超えた宇宙の構造の中で存在する現象であることから、同様に考えることができます。一方で、時間の尺度である1年が365日であることや、1日が24時間であることは、人類が時間を計測するために考え出した概念なので、社会的、文化人類学的な視点で時間を考えた場合には、時間は発明ということができそうです。

時計と時間に関して、これまで私はいくつも疑問をもちながら、そのままにしてきたことがありました。例えば時計の針は右回りですが、なぜ右回りなのかとか、なぜ1日が24時間で1時間が60分で1分間が60秒なのだろうとか、全宇宙で、時間は同一方向に向いているのか、それとも違う方向に向いているのか、それはどうやって証明したらよいのかといったことです。

この本にはそうした私の疑問に答えてくれるコラムがあり、「なるほど」と思いながら読むことができました。時計の針が右回りなのは、北半球で日時計が生まれたためということです。日時計を最初につくり出したのは、紀元前4000年～紀元前3000年のエジプトと考えられていて、エジプトは北半球なので、確かに北半球で日時計をつくれば影は南側にでき、東から上った太陽が西に沈む間、影は南側を右回りに動くこととなります。1300年頃に機械式時計がヨーロッパで発明された際に、時計職人は日時計の影の動きをそのまま受け継いだということでした。私は、以前オーストラリアに行った時に、ふと太陽の位置を確かめたところ、太陽は北側にあって、自分が南半球にいることを強く自覚したことがありました。

また、1日が24時間なのは、紀元前15世紀のメソポタミアにいたバビロニア人によっ

て体系化したということです。バビロニア人は自分たちより以前にメソポタミアにいたシュメール人の数学を使っていて、そのシュメール数学では12進法や60進法が多用されていたこと、1より小さいものを表すのに60分割することが行われていたということでした。また、数の数え方として、親指を除いた4本の指の関節を基準にしていたという説があり、この方法だと片手で12までを数えることができ、両手で24までを数えることができます。さらに著者の説明では片手で10の単位、別の片手で1の単位を数えるようにすることで60までを数えることができるとして、こうした数学的な背景や過程を経て、1日を24時間で計測するようになったということでした。

時間に関して考え始めるといろいろな疑問がわいてくる気がしますが、そもそも時間を発見した、あるいは発明したことが、人類が文明を獲得する重要な一歩であったことに間違いありません。目に見えないものを何かの別な形で計測し、具体化して概念化する能力を人類は進化のプロセスで獲得して他の動物と一線を画したのでしょう。ユヴァル・ノア・ハラリ氏は「サピエンス全史」の中で、人類がサピエンスとなったのは虚構を信じることができるからと述べています。時間の発見、発明も、そうした人間独自の虚構を信じる力によって獲得したものの一つなのかもしれません。

さて、時間をテーマにしたSFやファンタジーはたくさんありますが、真っ先に思いつく作品に、ミヒャエル・エンデの「モモ」があります。「モモ」の中には、灰色の男たちが登場し、人々に時間を節約することを勧め、時間を貯蓄銀行に貯めると命が倍になると言います。モモの親しい仲間たちも、灰色の男たちに騙されて節約した時間を貯蓄銀行に預けることを承諾してしまい、その結果、ゆとりのない楽しみのない人生を送ることになっていきます。最終的にはモモの活躍で灰色の男たちから時間を取り戻し、人々は再びもとの生活を取り戻しますが、作者の現代文明に対する痛烈な批判がメタファーとして小説の中に込められていることを感じます。分や秒は人間が作り出したものであるけれども、人間は自分のつくった時間に縛られている、そして今を楽しむことなく追い詰められて効率化を進めているが、それは私たちにとって幸せなことなのか、そんなことがメッセージとして伝わってきます。

将来の不安から今を大事にしない生き方は、エンデが、この小説を書いた1970年代よりも2026年の現在の方がより強くなっているように思います。将来のために努力をすることは必要なことではある、けれども、何のための努力かを私たちはいつの間にか見失ってしまい、努力そのものが目的化して、毎日不幸で灰色になった人生を送らなければならなくなってしまう。「モモ」をどのように解釈するかは、ネット上にもいろんな意見や感想が掲載されていますし、魅力的なキャラクターや登場人物をどのような視点で考えるかについても、いろんな考え方があるようです。自分の時間を自分がやりたいと思うことに使うこと、使うことができることは、人生を豊かに自由に生きる上でとても重要なことです。これから生きる子供たちには、自分の時間を自分のやりたいことをたくさん経験させたいものです。

時間を遡ることができたならば、現在のうまくいっていないことをひっくり返すことができるというSFもたくさんあって、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」などはその典型的な作品でしょう。私が時間を遡る話で最も印象的に感じているのは、ハリー・ポッターシリーズの「アズカバンの囚人」の最後の場面です。ハリーとハーマイオニーが時間を遡ることで、殺人犯とされているシリウス・ブラックを救い出し、ヒップグリフも救い出す場面です。この話で時間を遡ることができる仕掛けは、ハーマイオニーがマクゴナガル先生から預かった時計ですが、ダンブルドア校長から示唆されて時計を使って過去に戻り、事態をひっくり返すプロセスにおけるハリーの成長がシリーズ全体の大きなカギとなっているように感じます。時間を遡る前の段階では、ハリーは湖のほとりでディメンターに襲われた際に死んでしまった父親が現れてディメンターを追い払ったと考えています。しかし、時間を遡った結果、ハリーを救ったのは実はハリー自身であり、無力だった13歳の少年のハリーが、自分自身の力を自覚し、ヴォルデモートとの対決に歩み出していく重要な一歩になっているように思います。この時間を遡ることで起きたエピソードがシリーズ全体の中で意味のある行動となっているように感じます。

中高一貫校では生徒たちは6年間の時間を同じ学校で過ごします。ハリー・ポッターのように時間を遡ることができるものではありませんが、私は両国を含めてこれまで校長を務めた中高一貫校の多くの生徒たちが、中高6年間のどこかで人生を決定づけるドラマチックな経験や、出会いをしているように感じてきました。そうした経験や出会いは、貯蓄銀行に自分の時間を預けてしまうような、ぎすぎすした時間の使い方をするところからではなく、生徒たちが今を楽しんだり、努力したりすることから生まれてきているように思います。そして、生徒たちが自分の人生を自分で決定することができるようになる、自分の時間を自分がやりたいことで使うことができるようになる、発見や創造、想像力に満ちた学校生活を送ることで、より豊かな成長を達成するようになる、中高一貫校はそんな学校でなければならないと考えています。

両国の校長室に入ると右側に動かなくなった振り子時計があります。すでに時を刻まなくなってから長い年月が経っているようです。「時計の科学 人と時間の5000年の歴史」の中には、時計のメカニックについての説明もたくさん書かれていますので、振り子時計の仕組みを勉強して、動かない時計を動かしてみたい気持ちにもなりました。校長室の振り子時計を動かすことができれば、時間が一気に動き出して、今以上に活気ある学校になるかもしれない、そんなことも感じたりしています。

リンク

[2026年2月校長メッセージ 「キャリア教育優良校文部科学大臣表彰受賞について」](#)

[2026年1月校長メッセージ 「ガザのお父さんからの日本の中高生へのメッセージ」](#)

[2025年12月校長メッセージ 「唐獅子さん」](#)

2025年11月校長メッセージ 「カーボンリサイクル」

2025年10月校長メッセージ 「辞書を食べる」

2025年9月校長メッセージ 「恐竜の死体が化石化するプロセス」

2025年8月校長メッセージ 「グラフを発明したのは誰か」

2025年7月校長メッセージ 「早朝の両国にいるオナガは一体どこから来るのか」

2025年6月校長メッセージ 「現代社会における霸道と王道」

2025年5月校長メッセージ 「おいしいラッシーの作り方」

2025年4月校長メッセージ 「『NEXUS 情報の人類史』を読んで考えたこと」